

日本医史学雑誌 第五十卷 第二号 目次

原著

蘇軾（東坡居士）を通して宋代の医学・養生を考える……………小高 修司……………三九
 ——古代の気候・疫病史を踏まえて『傷寒論』の校訂を考える……………

Drop by Drop: The Introduction of Western Distillation Techniques into Seventeenth-Century Japan

……………Wolfgang MICHEL and Elke WERGGER-KLEIN……………四二
 Hippocratic Medicine and Philosophy at the End of the 20th Century (2)……………Spyros MARKETOS……………四六

研究ノート

明治前期官営産業施設のフランス人医師について……………須長 泰一……………三七
 ——産業医勤務体制の確立……………

ニコライ・コロトコフ——聴診による血圧測定の見聞……………藤倉 一郎……………三九
 お玉ヶ池種痘所——その設立拠金者八二名誤謬説の起源をさぐる……………深瀬 泰旦……………四五

資料

寛政甲寅考試書類三種——その二……………戸出一郎・町泉寿郎……………四六
 関場不二彦の未発表原稿「西医学東漸史話補遺」について……………秦 温信・島田保久・長瀬 清・鮫島夏樹……………四五

記 事

例会記録……………

例会抄録……………

産婆が書いた通俗衛生書『産前産後衛生心得』（明治三五年刊）について……………平尾真智子……………四五

書籍紹介

杉浦守邦『カルテ拝見 文人の死因』……………蔵方 宏昌……………四四

藤田恒夫・牛木辰男『カラー版・細胞紳士録』……………中西 淳朗……………四五

片桐一男編『日蘭交流史 その人・物・情報』……………石原 力……………四七

山崎 智『白き貝殻——日本海軍歯科医科士官の歴史』……………榊原悠紀田郎……………四九

松木明知 『華岡青洲と「乳巖治験録」』

西尾市岩瀬文庫

陽明文庫

岩瀬 敬司

遠藤 正治

奥沢 康正

《本号の表紙絵》

エドモンド・ナウマンの書
(大塚修琴堂所蔵)

Heinrich Edmund Naumann (1854~1927) は野尻湖底の象化石やフォッサマグナ発見に名を遺す地質学者で、いわゆる、御雇外国人教師の一人。ミュンヘン大学に学び、博士論文「シュタルンベルク湖の杭上住居址の動物群」により後年同湖で変死するルートヴィヒIIから学位授与(1875)。同年来日、東大理学部地質学及採鉱学科の初代教授となり(1877~79)、帰国後(1885)、独逸留学中の森鷗外と論争したことでも著名(1886~88)。

本品の由来は、昭和漢方界の巨頭大塚敬節(1900~80、高知出身)の大叔父仰軒(東大医学部中退、石炭王を夢みた快男児)が、在学中からの縁か、ナウマンの高知調査時(1883・84)、通訳を勤め、領石村の大塚家でナウマンを歓待した際の揮毫にかかり、今は東京四谷の大塚修琴堂医院の玄関を飾る。

扁額上部にドイツ語で「Wissen macht gelehrt, aber erst das Leben macht den Wissendenweise. (知識は博学たらしめる、それ以上に命はもっと深いものを教えてくれる)」とあり、下にその漢訳「学専見聞、命博経験(学は見聞を専とし、命は経験を博くす)」が見よう見まねの草書体(鵬斎風?)で書かれる。ドイツ語の前半はレッシングの格言で、ナウマンがそれをもじったものと識者の教示を得た。医師の箴言として恰好の内容である。名漢訳者は仰軒であろうか。詩画を能くしたナウマンの芸術的才幹をも窺うに足る珍品といえよう。(町泉寿郎)

岩瀬 敬司